

冬の陽だまり



美濃市の委託で同市小倉公園の修景整備を行いイメージが一新しました。お近くにお越しの際はぜひお寄り下さい。

そままっぴ



新しき仙人たちの羅針盤

第 4 号

NPO 法人  の杜 学舎

〒501-3781 美濃市片知 1109-4

森づくり片知支援センター内

TEL & FAX 0575-37-2115

URL: <http://www.somanomori.or.jp/>

e-mail: info@somanomori.or.jp

シリーズ 「日本の森林と 林業について考える」

【近年の林業がおかれている状況】

日本は国土の約67%が森林です。地球全体の森林率が28.9%であることから見ても日本は森林国といえるでしょう。しかし、日本の森林地帯の約6割を占める山村地域の人口比率は4%以下でこれは広大な森林地帯をごくわずかな人口で管理していることを意味します。

さらに、日本の人工林面積は1,000万ヘクタールに達しており、やがて成熟を迎える人工林の管理が21世紀の日本の森林が抱える大きな課題となっています。私たちの設立したNPO法人 杜の杜学舎のミッション(社会的使命)のひとつとして、管理放棄された人工林の

管理を置いているのもそのためです。

日本の林業は、昭和30年代の燃料革命による新炭林の崩壊や、木材輸入の自由化以降、常に外材との価格競争を強いられ、国産材価格の低迷により長い間不況の中にあります。さらに山村社会の高齢化と後継者不足、国有林の累積債務の増大など林業を巡る環境には多くの問題があります。こうした状況のもとで担い手を失った林業は打撃を受け、適切な時期に適切な施業を必要とする森林は放置されたままとなり、森林の荒廃を招き、日本の豊かな森林資源の多くが活用されない状況になってしまっているのです。

しかし、最近の環境への意識の高まりや循環型社会を構築するうえで、森林や林業の果たす役割が見直される傾向にあり、持続可能な活力ある森林を次世代に引き継いでいこうという意識は高まりつつあります。

第二次大戦後、木材生産を中心に発達してきた日本の林業は、今や小学校の教科書からも産業としての林業が抹消されてしまうほど衰退してしまいました。一方で、緑化産業としての林業や地球環境の保全、循環型資源としての木質系エネルギーや木材利用、さらには、地球規模での二酸化炭素吸収源としての森林管理など、環境を守る仕事として林業は再び注目されはじめています。

FAO (Yearbook of Forest Products) によると、2000年の世界の木材生産量は、3億7,700万立米で、このうち、63%に当たる21億3,600万立米が開発途上地域で、37%にあたる12億4,100万立米が先進地域で生産されています。開発途上地域で生産される木材のうち、79%は薪炭用材です。これは、世界の木材生産量の50%に当たり、そのほとんどが自国で消費されています。一方、先進地域では、薪炭用材の生産は14%にすぎず、生産する木材のほとんどが産業材です。

同年の木材輸出量は、生産量の14%に当たる4億6,400万立米となっています。そのうちの78% (3億6,300万立米) が、カナダや米国等の先進地域からのものです。また、輸入については、全体量の80%に当たる3億8,100万立米が米国や日本等の先進地域で占められています。我が国は純輸入量で見ると8,700万立米 (第2位の米国は3,800万立米) と世界最大の木材輸入国です。

国土の67%近くを森林で覆われているが、世界最大の木材輸入国であるという一見矛盾した構造は何処に原因があるのでしょうか。木材需要に対して外材の占める割合は80%を越し、かつて木材は山から運ばれるものですが、今では木材は海から運ばれるのが当たり前になっています。

戦後、一斉に植林された人工林が成熟期を迎え、国産材時代がやってくるはずでした。しかし、一向に国産材時代は到来せずに今日に至っ

ています。

木材資源は、日本が自給可能な数少ない有用な資源です。地球環境の危機が叫ばれる中、森林の管理をいかに行うかは日本の将来を左右する大きな問題です。かつて木を伐りつくして自然破壊の元凶といわれた日本の林業は、今では林業の衰退が森林の荒廃を招くという皮肉な状況になっています。

戦後の植林政策は、早期に森林の再生を実現したという点で評価すべきですが、人が植林した森林である以上、その機能を十分に発揮できるまでは管理することが必要です。スギ・ヒノキを中心とする人工林の循環型資源としての生産システムの再構築や、木材生産を放棄された人工林も可能な限り一代はその使命を全うさせ、自然林に転換していくことなどが、今必要とされているのだと思います。

(杉の杜 学舎 鈴木 章)

杉の杜倶楽部通信

十月四日(土)に五回目今年最後になる小倉山倶楽部(美濃市小倉公園)での森林整備ボランティアを実施しました。参加者は十三名、図書館から陽だまり広場にかけての整理伐採で、手鋸で直径10cmを越える木に挑まれる方もいて奮闘してもらいました。サクラを被圧して

いる常緑のヒサカキ等が切られて、徐徐に明る

い林に変わっていきました。
午後からは各自のお弁当に杉の杜学舎で用意したキノコ汁とどんぐりコーヒール(ソマツプ3号をご覧下さい)を囲んで、今年の活動を振り返り、来年の活動について話し合いました。皆さんが参加しやすい様に、活動日を日曜日に変える等の意見を頂きました。

十一月二十四日(月)に「里山の風景を考えるシンポジウム」が実施されましたが、パネルディスカッションで小倉山倶楽部の活動を報告しました。パネリストだけでなく会場の方にも積極的に意見を出してもらい双方向型の熱心な討議となりました。参加の多くの方が、里山の風景のためになにかしら行動しなければならぬという気持ちになったと思います。

来年以降も小倉山倶楽部として小倉公園の整備を続けますがシンポジウムの参加を機会に実践を始める方が多く現れることを期待しています。もちろん皆さんのご参加よろしくお願ひします。

美濃市教育委員会で、ドラム缶の炭焼き窯を購入し片知生涯学習センターに設置することになりました。この窯を使うと一日で炭が焼きあがりやすいため、今後炭焼き体験等のイベントを実施したいと考えています。

(杉の杜 学舎 小泉 信太郎)

活動報告(二〇〇三年 十月～十一月)

十月十一日(土)～十二日(日)の二日間、わたり「間伐講習会」を片知生涯学習センターにて実施しました。参加者は十五名で、講師の島崎洋路先生の間伐講義と実技指導を受けました。

十月十八日(土)山火事跡地再生植樹活動「第4回 みんなの力で緑を大作戦」が、岐阜市の藍川中学校裏山で行われました。杉の杜学舎では、植樹地の整備作業、植樹指導者として活動に参加しました。

十月二十六日(日)イオン環境財団等の主催による「岐阜・山火事跡地 森の再生・植樹活動」が行われました。杉の杜学舎では、植樹地の伐採、地拵え、作業歩道整備、植樹活動の企画・運営を担当しました。当日は、ボランティア、スタッフ合わせて約1000人の参加があり、広葉樹の苗木6,000本を植樹しました。

十一月五日(水)森林整備事業の先進地視察として三重県宮川村を視察しました。

十一月十日(月)美濃市内の民家の松枯れ木の伐採を受託し作業をしました。

十一月十三日(木)森林文化アカデミー演

習林内のモノレール敷設のための整地作業を行いました。

美濃市「ふくべの森」にて、美濃市立下牧小学校5年生を対象に、トチノキの植樹活動を行いました。

十一月十九日(水)・二十一日(金)の二日間、にわたり、小倉公園修景整備を行いました。図書館裏から陽だまり広場に向けてのエリアをサクラの植栽木の樹勢回復と修景のための伐採作業をしました。伐採木は現場でチップパー機を用いて粉碎処理を行いました。

十一月二十四日(月)美濃市森林景観調査事業の啓発活動として「里山の風景を考えるシンポジウム」を森林文化アカデミーテクニカルセンターで実施しました。アカデミーの熊崎学長の基調講演と「みんなでやるまいか小倉公園」と題して同じくアカデミーの八尾先生をコーディネーターにパネルディスカッションを行いました。

美濃市内の横越、大矢田、曾代地区の人工林約4.6ヘクタールの間伐を受託し施業をしました。

事務所移転のお知らせ

杉の杜学舎の事務所を十一月一日に美濃市の「森づくり片知支援センター」へ移転しました。支援センターは清流片知川に近く、これまで分散していた山仕事の道具類をまとめて保管できる大きな倉庫もあり、今後の活動の弾みとなるものです。また、片知生涯学習センターにも近く、講習会事業、環境教育事業等にも力を入れて行きたいと考えています。

新住所 〒501 3781

美濃市片知1109 4

森づくり片知支援センター内

電話・FAX 0575 37 2115

MAIL info@sonanohor.jp

編集後記

間伐講習会、森の再生・植樹活動、シンポジウムと次から次へと行事が重なり、バタバタしている間に年末になったと感じています。しかし、立ち上げたばかりのNPOで千人規模のイベントの事務方を実行でき大きな力と自信を持つことができた実りの秋でした。来年はより一層の飛躍の年にしたいと思います。

どうぞ良いお年をお迎え下さい。(信)